

News Letter

Graduate School of Education



第21回教育学部祭

巻頭言

楠見 孝 研究科長

2

名誉教授から

岩井 八郎 名誉教授

稲垣 恭子 名誉教授

3

研究ノート

〔教員から〕開沼 太郎 教育社会学講座 准教授

〔院生から〕柴田 恭亘 修士課程1回生

〔院生から〕等々力 花歩 博士後期課程1回生

〔留学生から〕孫 詩榕 博士後期課程2回生

4

活動報告

〔附属臨床教育実践研究センターから〕

岡野 憲一郎 附属臨床教育実践研究センター長

〔教育実践コラボレーション・センターから〕

西 見奈子 臨床心理学講座 准教授

〔グローバル教育展開オフィスから〕

高山 敬太 グローバル教育展開オフィス 室長

6

トピックス

「日本型」教育文化・知の継承支援モデルの構築と
展開プロジェクト

VAN STEENPAAL Niels 教育・人間科学講座 准教授

7

コロナ禍の学生から

佐藤 大修 1回生をつなげる会 教育学部2回生

8

事務室から

鍋島 かおり 教職教務掛員

8

国際交流事業

安藤 幸 グローバル教育展開オフィス 講師

9

若手研究者出版助成事業

9

諸記録

- ・主な出来事 (2020.11.1～2021.3.31)
- ・入試結果 2021 (令和3) 年度
- ・学位授与件数 2020 (令和2) 年度
- ・教育職員免許状取得状況 2020 (令和2) 年度
- ・外部資金受入れ (2020.10.1～2021.3.31)
- ・科学研究費補助金 2021 (令和3) 年度
- ・教員寄贈図書リスト 2020 (令和2) 年度
- ・人事異動 (2020.11.1～2021.4.30)

11

諸報

- ・新任教員・事務職員紹介
- ・名誉教授訃報

15

教育学研究科・教育学部基金

16



京都大学 大学院教育学研究科ロゴマーク

このロゴマークは、京都大学学術情報メディアセンターの元客員教授・奥村昭夫先生のデザインです。奥村先生は、ロート製菓、グリコ、牛乳石鹸などのロゴマークやパッケージなどを手がけた著名グラフィックデザイナーです。本研究科・学部の「育ち」「つながり」「先端」といったキーコンセプトをもとに、教育学部本館の正面玄関を見守るクスノキの葉をモチーフとし、緑のグラデーションで成長の変化、中央の空間でこれから生まれてくるものを表わし、全体として優しく包み込むイメージのデザインとなっています。

新型コロナウイルスといかに向き合うか： 教育学研究科・教育学部の2年目の課題

教育学研究科長・学部長 楠見 孝

新型コロナウイルスの感染の流行が、1年を経過しても続いています。今年度は授業を対面形式で始めましたが、4月22日以降は多くの授業でオンライン形式に移行せざるを得なくなりました。学生の皆さん、とくに昨年度1年間つらい思いをしてきた2回生、希望を持って入学してきた1回生にとっては、さぞ残念なことと思います。また、教職員の皆さんには、感染拡大防止のため、授業形態の変更などに対応いただいていることに感謝申し上げます。

また、卒業生の皆様からは、教育学部同窓会（京友会）を通して、困窮する学生の経済支援のために多くのご寄付をいただき、これまで5回にわたって学生に支援金の給付を行うことができました。これは、他学部や研究科にはない独自の支援であり、ご協力を賜りました皆様には、大変感謝しています。改めましてお礼申し上げます。

教育学研究科・教育学部では、これまで1年以上にわたって、教職員と学生の皆さんの協力のもと、新型コロナウイルスの感染拡大に対応してきました。感染拡大の終息が依然として見えない状況ですが、昨年度の経験、そして、学生の皆さんからの意見を踏まえて、つぎのような実践をしていきたいと考えています。

第1に、授業については、オンラインに移行する講義科目では、双方向的なやりとり、適切な量の課題とフィードバック、音声の質の改善などに留意し、学生の皆さんの意見を取り入れてより良いオンライン授業を提供したいと考えています。また、対面で実施する授業については、感染対策に万全の体制をとるとともに、登校がむずかしい学生については学修の機会が確保できるよう配慮したいと考えています。

第2に、学生の皆さんへのサポートについては、昨年度はPandAを利用したオンラインのコミュニティを設け、Zoomを利用した2回の懇談会や21回の研究室紹介などを行いました。参加者が徐々に減ってきたのは、オフラインの人間関係ができてきたためと考えています。一方では、人間関係を作るのに苦労している学生もいると思います。また、新入生の中には親しい人間関係を十分に作る間もなく、オンライン授業になってしまった人もいでしょう。教育学部の特徴は、少ない学生数を活かした、学年内・学年間のつながりにあると思います。ぜひお互いに声を掛け合って孤立することのないようにしてください。そして、教職員は、全体へのサポートとともに、個別の学生に対するサポートもしたいと考えていますので、心配事のある人は遠慮なく相談して

ほしいと思います。また、先に述べました同窓会による経済支援は今後も続ける予定です。

なお、昨年度は、教育学部祭がオンラインで3月に実施され、教育学部祭二十周年記念誌がまとめられました。ここには、教育学部における縦と横



のつながりに基づく、よき伝統が受け継がれていると思います。中心になって活動した学生と卒業生、支援にあたった教職員の皆さんに感謝しています。

第3に、全国のエducation関係者や子どもたち、保護者に向けた発信があります。新型コロナウイルスの感染拡大は、小中高の教育にも大きな影響を与えており、先生方や子どもたちをいかに支援するかは、教育学研究科にとって大事な課題です。教育実践コラボレーションセンターのE.FORUMによる学習リソースを集めた「子どもたち応援サイト」のウェブページや、ICTの活用などに関する連続講演会は、全国の小中高の子どもや先生に向けた情報発信であり、今後も継続していきたいと考えています。

第4は、コロナ禍での国際交流や国際発信です。昨年度は、国境を越えた渡航や受け入れはできませんでしたが、オンラインでの北京師範大学教育学部との大学院生交流と学術交流協定更新、中国教育科学研究院およびドルトムント工科大学教育科学・心理学部との学術交流協定更新などを進めました。他の研究機関も含めて、実質的な交流をいかに展開させるかがこれからの課題です。グローバル教育展開オフィスではこれまで、全9回のレクチャーシリーズを開催し、国内外の講演者による教育と文化をめぐる講演を多くの参加者を得て行うことができました。また、英語論文の出版や国際学会発表の支援を行いました。今年度は、これらの成果を踏まえて、こうした活動を継続するとともに、最終年度を迎える「日本型」教育文化・知の継承支援モデルの構築と展開のプロジェクトの成果である論文集の出版を行う予定です。

最後になりますが、教育学研究科・教育学部の教職員、学生が、新型コロナウイルスに向き合い、今でしかできない教育や研究、そして学習を進め、コロナ後のより良い教育や社会の実現を目指すことができればと考えています。

25年のあとかき

岩井 八郎

本年3月31日に定年退職しました教育社会学の岩井八郎です。1996年4月より25年の長きにわたり、誠にありがとうございました。赴任する2年前から比較教育学の英文講読の非常勤を通年で担当していたので、27年もお世話になりました。最初は生涯学習計画講座の助教授として着任しましたが、社会調査とKUINEPを長く担当しました。

私は旧システムの最後の恩恵を受けることができました。2004年3月から在外研究でベルリンのマックス・プランク研究所に10ヶ月、また2008年11月に京大の教育研究振興財団から短期派遣助成をいただいて米国イェール大学に3週間滞在できて、その後の研究にとってとても有益な機会となりました。外部資金も順調に獲得でき、専門のライフコース研究で2009年から19年までの10年間を追跡するパネル調査も無事完了しました。このデータの分析が残された仕事です。

学部学生もゼミにはよくきてくれました。ユニークで面白い人たちが集まり、楽しかった思い出ばかりです。歴代の庶務、教務、会計、総務、図書の方々、本当にお世話になりました。いろいろと無理を聞いていただき、感謝しかありません。他講座の先生方から、卒論、修論の副査としてよく声をかけていただきました。口頭試問では、好き勝手なコメントをしてしまいました。お許してください。

教育研究面では、さほど心残りはないのですが、京大アメリカンフットボール部の部長を7年勤め、7年間の公式戦の通算成績が負け越しなのが残念です。なんとか勝ち越しに戻して欲しかったのですが、コロナ禍で実現できませんでした。今後ともギャングへの応援をお願いいたします。

京大を定年退職した後は、2023年に現代社会学部の設置を構想中の大阪の私立大学で、設置の手伝いをするようになっておりますが、まだ具体的な仕事は始まっていません。

教育学部・教育学研究科のますますの発展を期待いたします。

長い間本当にありがとうございました。



内外両用眼鏡で

稲垣 恭子



昨年9月に教育学研究科を退職し10月より理事・副学長の仕事に移りました。同じ学内にいることもあって退職の実感があまりないのですが、4月から研究指導やゼミから離れることになって、自分でも意外なくらいですが、教師という仕事に支えられてきたところが大きいことに気づきました。学部・大学院の学生として9年、教員として25年という長きにわたって教育学研究科で研究・教育に携わることができたのは大きな

財産です。改めて感謝申し上げます。

現在の私の担当は、男女共同参画・国際・広報・渉外と広い

範囲にわたっていますが、実際に仕事をしてみると相互に関連したところが多く、新しい企画やプロジェクトを進めていくときには、かえって横の連携がとりやすいこともあります。また渉外や広報の関係で学外のさまざまな分野の方と接する機会が増え、大学が外からどうみえているかをリアルに感じることもしばしばです。長年、京大にいても見えていないことも多く、普段使っている遠近両用眼鏡に加えて、内からと外からの両方を見られる内外両用眼鏡の必要を感じています。

最近、イベントや会議もオンラインのことが多く運動不足が気になりますが、これまであまり読んでこなかったジャンルの小説など、読書の楽しみは少し広がってきました。大学の活性化には多様な視点の共存が重要ですが、個人的にも新しい世界を楽しむ時間も持ちたいと思っています。

研究科でも新型コロナウィルスへの対応でご苦労されていることと思います。オンライン授業と対面の関係、フィールドワークや海外経験の意味など、大学と教育の根幹に関わる課題が改めて問われている中、新しい時代の教育研究の発展の契機になればと期待もしております。大変な時期ですが、皆さまの健康と教育学研究科・教育学部の益々の発展をお祈りしつつ。

これからもどうぞよろしくお願いいたします。

教員から

カリキュラム・マネジメントとSTEAM教育政策



教育社会学講座
准教授

開沼 太郎

縁あって学生時代にお世話になった教育学研究科へ着任させていただくこととなりました。先生方の顔ぶれが変わり、教室の配置が変わり、授業の進め方が変わり、勝手知ったる(と思い込んでいた)17年前までの常識が通用しない状況の中で、研究科の皆様方にお力添えいただきながら何とか日々を過ごしています。

昨今のGIGAスクール構想などにみられる「教育の情報化」政策を中心に、ICTの活用のある方や資源配分について検討を進めてきましたが、最近興味をもって取り組んでいるテーマが、カリキュラム・マネジメントを通じたSTEAM教育政策です。

教科横断的な授業づくりなどの横のマネジメントにあたる教科間・領域間の「つながり」、保幼小連携・小中連携などの縦

のマネジメントにあたる学年間・学校段階間の「つながり」、日常生活との関連性や休み時間・放課後、部活動との接続性などの内外のマネジメントにあたる教育課程内外の「つながり」を図るために、PDCAサイクル間の「つながり」(根拠やデータに基づく授業改善など)、学校組織内外の「つながり」(地域との人的・物的連携、外部の専門家との連携など)を実現する方策を体現する核となるのがSTEAM教育です。科学教育との関連性やICTを活用した日常生活の間接(仮想)体験など、様々な領域を横断的に捉えて学びに反映するSTEAM教育は、カリキュラム・マネジメントを支える概念として重要な役割を果たすものです。

現在、前任校である大阪大谷大学に設立されたSTEAM Labの客員研究員として、理科や数学の研究者と連携しつつ活動に従事しています。教育行政学の領域でも、どこまでが学校教育なのか、社会教育とは何かといった従来の常識を問い直す必要に迫られる中で、総合的・学際的なアプローチから示唆を得られるのではないかと考えております。

院生から

文学研究したくない人の文学研究

教育社会学講座
修士課程1回生

柴田 恭亘

小さい頃から小説を読むのが好きだったので、卒業論文のテーマを決める際に、文学を研究対象にしようと思いました。しかし

研究を構想する中で、文学を研究しようとするとき、それはすでに自分が好きな「文学」ではなくなってしまうことに気がつきました。文学作品を研究する場合、それを何らかの形で分析することになりますが、自分にとって文学は分析=客観化するものではなく、読書を通じて一体化することによって楽しむものだったからです。

そのように研究の方向性に迷っていたとき、アメリカの高等教育機関には、文学を専門にしながらも文学を研究しない学位課程「Creative Writing Program」があることを知りました。日本語では「創作科」と呼ばれることが多いのですが、この課程に入学した学生たちは文学を研究するのではなく「書く」のです。そこでは学生自筆の作品を教員やクラスメイトが

批評するワークショップが主な授業形態で、入学者選抜や卒業審査も学生自筆の作品にもとづいて行われます。

このような教育課程がアメリカではかなり普及している、そして現在進行形で規模拡大しているということを知って、単純にそこがどういう所なんだろうと関心を引かれると同時に、創作科を研究対象に据えれば、「文学を研究したくない」という自分の気持ちにつながることを研究できるのではないかと考えました。

詳しく調べ始めると、創作科をめぐる興味深い現象が生じていることがわかりました。現代アメリカ作家のほとんどは何らかの形で創作科と関わりを持っていると言われるほど、彼らと創作科の関係は深いのですが、創作科の卒業生の中には、そこで受けた影響を積極的には認めない人が多いのです。現在は、なぜそのような現象が生じるのかという問いを中心に、日本から遠く離れたこの不思議な教育課程について試行錯誤しながら研究しています。

院生から

子育てに携わる方々に、研究の知見を届けたい



教育・人間科学講座
博士後期課程1回生
等々力 花歩

大学院進学を意識したのは、学部3年生の夏、幼稚園での教育実習での体験でした。子どもたちと関わることはとても楽しく、やりがいも感じました。しかし、実習経験を積み重ねるほど、自分は子どもたちに対して何ができているのだろう、という不安も募っていききました。あの時子どもに対して行った対応は最善だったのだろうか、今日の保育は子どもにとってどんな意味があったのだろうか。

悩みながら園と自宅を往復する日々が続きました。苦しい経験ではありましたが、同時に、それを乗り越えるために必要な学術の知見をもっと得たい、研究で得た最新の成果を現場に還元したい、という思いが強く湧き立ってきました。子どもの発達に関する基礎研究の成果を現場に届けることができれば、悩みながら保育実践を行う方々の自己効力感を高め、自信を

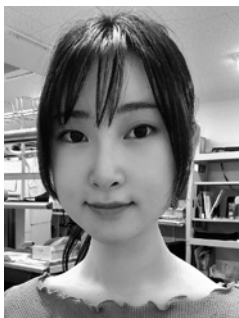
もって子どもに接することが可能になるのではないかと考えたからです。

大学院入学後は、素晴らしい研究環境で、乳幼児期の社会性発達にかなする実証研究を行い、この3月に修士号を取得することができました。互いに尊敬し切磋琢磨しあえる研究室メンバーと出会えたことが、この2年間を支えてくれました。

調査に参加してくださった親御さんとの出会いからも多くを学びました。研究室に閉じこもっていると、目の前の研究を進めることで頭がいっぱいになり、自分が何のために研究をしているのか忘れそうになることも多々ありました。しかし、COVID-19感染拡大により対面調査を中断せざるを得ない事態となったとき、お子さん、親御さんの協力があって初めて自分の研究が成り立っていたことを改めて実感しました。現場に基礎研究の成果をしっかりと伝えたいという思いが、以前にも増して強くなった1年となりました。コロナ禍が長期化するなか、現場の不安はいっそう高まっています。今こそ、研究者として何ができるか、何をなすべきかを考え続けていきたいと思っています。

留学生から

「心」を忘れずに



教育認知心理学講座
博士後期課程2回生
孫 詩榕

「心理学を学んでいるのなら、人の心が読めるんですか？」と聞かれたことがあります。アメリカの大学で心理学を専攻していた私にとっては難問です。西洋の思考様式に基づいて心理学を学んだ私にとって、サイコロジーはメンタル・プロセスを研究する学問です。心よりも脳のプロセスが問われています。私は昔から日本文化に興味を持ち、日本語を自分で学習することを通して、日本文化特有の思いやり、侘・寂の概念につ

いて、より深く知りたと思いました。アメリカの大学で心理学を専攻しながら、日本語も勉強しているうちに、日米文化の違いを実感しました。そして、文献調査を進めるにつれて、文化が人、心に影響を与える源だと感じるようになりました。その経験を踏まえて、東洋における心理学の研究拠点である日本へ留学し、両方の心理学を熟知することを目指しました。

日本では、「メンタル・プロセス」は「心的過程」、「メンタルローテーション」は「心的回転」、「メンタル・リプレゼンテーション」は「心的表象」、これらが日本の心理学講座に入っただけの私にとっては凄く新鮮でした。「心とは何？」これは、アジアで心理学を研究するようになってからよく聞く質問です。「心は意識」、「心は行動」、「心は無意識」、「心は脳の働き」、答えは色々ありますが、私にとって「心は思いやり」です。生き物だけが心を持っている、なぜなら生き物だけが思いやりができるからです。日本で三年間、「他人の不幸は蜜の味」というテーマを研究しているうちに、日本人の思いやりは「共感的苦痛」、「いい気味を感じた後の後悔」、「他人が期待する自分」など、日本文化特有な特徴を多く反映していることが分かりました。文化の違いは最終的に人に表れます。特に留学生である私にとって、自分と違う文化に接触する時、文化差によって理解が難しい時などがよくあります。しかし、その時こそ、「心」が働く時です。「自分とどこが違うか？どんな風に違うか？」常にそれを理解しようとするのが大事です。研究活動の中でも、日常生活の中でも、必ず「心」を忘れずに、「心」を持った人になりましょう！

附属臨床教育実践研究センターから

臨床教育実践研究センターの活動

連携教育学講座 教授
附属臨床教育実践研究センター長
岡野 憲一郎



当センターは、一般市民に開かれた臨床実践としての、心理教育相談室での大学院生や教員による日々の臨床活動をその主たる業務としています。また、学校現場に密着したテーマを現場に還元することを目指し、教師、臨床心理士、精神科医等が交流し思索を深める「リカレント教育講座」、一般市民への教育的啓発を目的とする外国人客員教授による「公開講座」、学校現場での実践を心理・教育的に検討する「現場実践ケースカンファレンス」、東日本大震災被災者に向けた「こころの支援室」の活動、センター関連の研究成果を収めた「京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要」の発刊など、多岐にわたる教育・実践・研究活動を行っています。

昨年度は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大の影響を受けて、「リカレント教育講座」、「公開講座」はいずれも開催中止となりました。その後、「リカレント教育講座」についてはオンラインでの開催の可能性も含めて検討を重ねて

まいりましたが、諸般の事情により残念ながら今年度も開催を見送ることとなりました。毎年多くの方々にご参加いただいている当講座を開催できないことは、誠に残念ではございますが、来年度以降に万全の状態でご参集するための判断とご理解いただけますと幸いです。なお、今年度の「公開講座」はユング派心理療法家のアレクサンダー・エスター・ホイゼン先生にご講演いただく予定であり、現在開催に向けて準備を進めているところです。

東日本大震災に関連して関西に避難・移住されてきた子育て世帯を対象として、継続的に支援活動を行っている「こころの支援室」も、昨年度の企画はコロナ禍の影響を受けて残念ながら開催中止となりました。震災から10年以上が経過し、個々の参加世帯の状況も個別化してきておりますが、今後もこれまでのつながりを大切にしながら、ニーズに合わせた支援活動を行えるよう引き続き模索してまいります。

教育実践コラボレーション・センターから

コロナ禍における教育実践コラボレーション・センターの活動について

臨床心理学講座 准教授
西 見奈子



教育実践コラボレーション・センターは、元々、平成19年度に「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」というプロジェクトとして立ち上げられ、その後、平成25年度には「学校を中心とする教育空間における力動的秩序形成をめぐる多次元的研究」という研究課題が基盤研究（A）に採択され、活動を展開してきました。教育実践コラボレーション・センターの特徴は、子どもをめぐる教育問題の中心を「生命性を深めること」（心の問題）と「有能性を高めること」（学力問題）という2つの軸から捉え、そのトータルな育成の方法を探るところにあります。さらにそうした問題について、異なる専門的立場からの意見を融合して考えるという点はこのセンターならではの大変魅力的なところではあります。

例えば、昨年度は、GAPファンドによるプログラム「ポスト・コロナの初等中等教育におけるICT活用に関する研修プログラム開発と具体的提言」や全学経費によるプロジェクト「ポスト

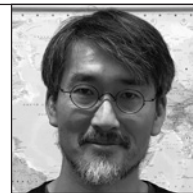
コロナ時代における教育問題解決に向けた学校支援の展開」がおこなわれました。新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、教育現場にも大きな影響を与えました。中でも教育のICT化をどのように考え、進めていくのかという問題は、もはや避けては通れない問題です。昨年度のE.FORUM連続研究会「学校教育におけるICT活用」や知的コラボの会では、ICTに関わる様々な専門家をお招きして、お話を伺いました。それらは、教育実践コラボレーション・センターが、教育現場に必要な優れた知見を継続的に得られる場として機能していることを実感させてくれるものでした。

精神分析の中には、破局的変化（Catastrophic Change）という言葉があります。コロナ禍の混乱と恐怖は想像を超えるものですが、その中においてもこうした活動を通して、人間が新たな創造物が生み出していくことを祈っております。

グローバル教育展開オフィスから

「落としどころ」を探して

グローバル教育展開オフィス 室長
高山 敬太



オーストラリアのラトロープ大学で長年社会学を教えていた杉本良夫は、日本の社会科学の現状に関する評論において次のように述べています。すなわち、日本の研究者は『何語で書こうと、読者は日本だけではなく、世界中にいるのだという気概』、つまり『コスモポリタニズム』を日常化してこなかったと。2年前に赴任した私は、以来、大学院に入りたての学生が履修する「基盤演習」のゲスト講義のトップバッターを担当していますが、その際、かならずこの評論を持ち出して、学生さんに問いかけています。「ハッとさせられた」、「痛いところを突かれた」というのが大方の反応ですが、時には、「英語至上主義がもたらす知の生産への悪影響が考慮されていない」という反論を表明する学生もいます。確かに、杉本の言う『世界』がそもそも何（誰）を指しているのかという問いは大切です。実際、英語を媒介とした学術知の生産と流通においては、不均等の力関係が存在すると言われていています。世界のどこで「理論」が生産され、だれがその「消費者」としての役割を担っているかを考えれば、一目瞭然です。日本の社会科学は、このグローバルな知の分業体制において、消費者として長らく位置づけら

れてきたように思います。英語という言葉の問題を超えた知の構造の問題が存在する中、教育研究を日本からグローバルに展開するとはどういうことなのか、その可能性と限界について、研究者としての道を歩み始めた学生さんたちに少しでも考えてもらえれば、と思い講義を担当してきました。ですが、ここまで書いてきた問題意識、実はグローバル教育展開オフィスが行っている様々な活動や支援事業を考える上でも非常に大切だと感じています。安易なコスモポリタニズムや普遍性の追求に加担するのではなく、同時に日本特殊論らの相対主義からも一定の距離をとる、これには微妙な匙加減が必要になるわけですが、その「落としどころ」を探ること自体も、実は当オフィスのミッションの一つなのではないかと考えて始めています。こうした問題意識を多分に反映した事業として、7月から新しいウェビナーシリーズ『『日本型教育』を相対化する：東アジアの教育対話を通じて』（仮題）を予定しています。詳細は当オフィスのウェブサイトにて近日中に公表いたしますので、振るってご参加いただければと存じます。

トピックス

「日本型」教育文化・知の継承支援モデルの構築と展開プロジェクト

日本型教育文化を進化論で考えてみたい。一見、ばかげた提案だが、さほど斬新な試みではない。というのも、DNA伝播単位の「gene」と、文化伝播プロセスの「mimesis」を合わせて「meme」という混成語にし、それを文化伝播の単位として進化論的に検討していく「ミーム学」という分野さえ存在している。そして、この分野から考えると、「ミーム」としての日本型教育文化は分岐点に立っているといえる。従来、自然淘汰の原理のもと、「日本」という環境に適応して自己複製してきた日本教育が、これから海外展開に挑む。となると、自分を受け入れてくれる他国の相手を口説く必要が生じる。つまり今後の日本教育は、自然淘汰に加えて、性淘汰にもさらされるわけである。

日本教育がどのような求愛行動にでるのか。アピール方法は二つ。第一に、「正直シグナル」である。例えば、天敵に発見される危険も厭わずに、雄ガマが長時間に鳴き続けて、雌

教育・人間科学講座 准教授

VAN STEENPAAL Niels



ガマを呼び寄せるように、リスクを負ってこそ、自分がふさわしい交尾相手であると誇示する。ハイコスト・ハイリターン戦略である。第二に、「不正直シグナル」がある。小柄の雄ガマが、大柄ガマの低いピッチの鳴き声をまねて、ワンランク上の相手をだまし取るようなやり方である。ローコスト・ハイリターン戦略であるが、雌ガマたちは、こうした偽り行為のせいで、「正直」と「不正直」なシグナルを聞き分けるために余分な努力をしなければならない。結果的に、ズルいガマ一匹が回避したコストは、ガマ集団全体に転嫁されるわけである。

では、日本教育はこれから海外にどのシグナルを発信するのか。「日本」環境に適応してできた日本教育をありのままにさらけ出すのか。それとも、相手の好みどおりに上辺だけ粉飾した、海外専用の日本教育を提供するのか。コストを担う覚悟と誠意が問われる選択肢である。分岐点といったのはつまりこのことである。

「リアル」な対話を求めて

1回生をつなげる会
教育学部 2回生
佐藤 大修

この団体は2020年9月に京大の1回生有志によって結成されました。サークル活動が規制され、授業もオンラインになることで孤立した1回生を他者と「つなげる」ことを目的に活動してきました。一方でコロナ後に私たち大学生の苦しみや経験までも、オリンピックや社会のための美談や物語に使いつぶされてしまうのではないかという危機を抱き、自分たちの経験を自分たちで歴史として記録し、発信することを掲げました。これまでに鴨川での座談会やオンラインでの情報発信番組、学部間交流会など様々な企画を行ってきました。その集大成として2021年3月には、Twitterをもとに学生の声をまとめた報告書『コロナ禍の京大1回生』を作成し、各学部と大学に送付しました。

コロナ禍で1・2回生を過ごすことになった令和2年度・令和3年度入学生は対面での多くの機会を奪われています。大学と

いう新しい環境へ踏み出した1回生にとって、友人や先輩とつながり、コミュニティに所属するためにも対面の機会はとても重要です。サークルも大幅に活動を縮小しており、学生同士を授業外でつないできたコミュニティの助け合いやセーフティネットとしての機能が弱まっています。教育学部では学部祭の一部対面企画やラウンジの解放、対面授業の機会確保などさまざまな面で学生がつながり、助け合うために力を尽くしてくださっていました。学生にとって対面の機会とは対話にひらかれた対等な場であり、関係を結び世界を見つめるうえでとても大切なものです。今年度から私たちは「京大生をつなげる会」として、対象を1回生から京大生全体へと広げます。学生一人一人の経験や声を集め、発信するとともに彼らをつなげるための対話と交流の場をイベント企画によって創り出していきます。

大学職員から見たコロナ禍

教職教務掛員
鍋島 かおり

「大学職員から見たコロナ禍について」というテーマで原稿依頼があり、まず思い浮かんだのは、2020年3月から4月にかけての混乱期のことでした。当初は感染リスクを避けつつ、対面授業を実施する方針で準備を進めていましたが、授業開始の1週間前に5月6日までの休講および全面オンライン授業の実施が急遽決定されました。その後、教育学研究科の新型コロナウイルス対応WGで授業担当教員へのオンライン授業の実施依頼とともにPandA、Zoomのアカウント手配、教員研修など全面オンライン授業の準備に邁進し、GW前にオンライン授業が無事に実施できる見込みが立った時のほっとした気持ちは今でもよく覚えています。と、思ったのもつかの間、今度は対面授業を希望される声とオンライン授業を希望される声の板挟みに悩むこととなりました。新型コロナウイルスに対する感じ方やリスクは人それぞれで、すべての人が納得できる選択肢は難しく、大学でも試行錯誤が続いています。対面とオ

ンラインの双方で受講可能なハイブリット授業は、教員の負担増加、設備面、機器のトラブル、ICT支援員の不足、科目の性質によっては授業の質が低下しかねないなど、様々な課題があります。感染リスクを避けながら授業の質を担保し、教職員・学生の皆様に過度な負担がかからない方法があればなあと思いを馳せますが、すべてを解決する夢のような解答はまだ見つかっておらず、都度、バランスを考慮しながら一步步つ前進していくかなさそうです。何が正解かわからない状況で取り組み続けるのは忍耐が必要ですが、我慢弱く自分がなんとか業務に携わり続けてこられたのは、先導してくださる先生方、一丸となって業務に取り組んでくださる職員の方々、また、学生の皆様のご理解・ご協力のおかげだとしみじみと感じます。まだしばらくコロナ禍は続きそうですが、少しでも皆様が楽しい大学生活を送れるよう、応援していければと思います。

ドイツ・ドルトムント工科大学教育科学・心理学部との 学術交流協定更新

グローバル教育展開オフィス 講師
安藤 幸

本研究科とドイツ・ドルトムント工科大学教育科学・心理学部(当時は教育・心理・社会学部)は、研究者間で行われてきた交流をもとに、2016年に学術交流協定を締結しました。

2016年以降は毎年、教員を相互に派遣し院生や学部生を対象とした講義を行ってきました。また、2018年からは毎年ワークショップを開催しています。第1回目(2018年3月6日)は本研究科において「教育研究のあり方(Bildungsforschung)」をテーマに、第2回目(2019年3月1日)は同学部において「文化を超えた日本らしさの理解(Japanese-ness in Transculturality)」をテーマに、第3回は(2020年3月6日)は本研究科において「市民性教育(Global Citizenship Education)」をテーマにして、研究発表を行いました。その他にも、2019年10月23日には本研究科において、双方の若手研究者が集まり、「Amae(甘え)の異文化間対話」をテーマにしたワークショップを実施しました。

同学部には、日本の教育、社会や文化、哲学に興味を持つ教員や研究者が多く在籍しています。また、教員間の共同研究を通して、同国の教育学会主催シンポジウムで発表も行ってきました。

学術交流には、活発な学生交流も含まれます。2018年には、本研究科の院生が同学部教員の指導のもとインターンシップを行ったほか、同学部から学部生2名をインターンシップ生として受け入れました。2019年には、本研究科の院生1名が論文の助言を受けるため同学部教員を訪問していま

す。さらに2020年にも、本研究科の院生2名が同学部においてインターンシップを、別の院生1人が同学部教員の指導のもと地元の幼稚園でフィールドワークを行いました。

このように、本研究科と同学部は、英語を共通言語とし、学術交流活動を着実に発展させています。2020年度からは新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大に伴い、従来のような対面でのワークショップや交流が難しくなっています。ウィズコロナ、ポストコロナを見据え、オンライン形式でのあらたな交流のあり方を模索しています。

これまでの交流の成果を振り返り、学際的な研究教育活動をさらに活性化させていきたいとの思いから、協定の更新を行うことになりました。3月26日に日本とドイツをオンラインでつなぎ、学術交流協定の更新のための調印式を行いました(写真は、調印式での集合写真)。今後は、心理学、社会学、文化学、社会福祉学なども含む多様な学問領域における共同研究やワークショップを展開し、同学部との連携を強化していきたいと考えています。



若手研究者出版助成事業

教育学研究科では、京都大学総長裁量経費を得て、優秀な若手研究者による博士論文の出版助成事業を行っています。本制度を利用して昨年度は6件採択されましたので、ご紹介します。



子どもが行為を紡ぐとき ルーティンの獲得と実行機能の発達心理学研究 【ナカニシヤ出版】

柳岡 開地 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了(2019.3.25) / 東京大学大学院教育学研究科・日本学術振興会特別研究員P D

大学生になってアルバイトを始めた方は、新しい仕事手順を四苦八苦しながら覚えたという経験があるのではないでしょうか。実は、子どもにも新しく手順を覚えなければならない場面は多く存在します。保育園での朝の用意、着替え、バスの乗り方、どれも日常生活を送るうえで重要なものばかりです。本書は、こうした行為の手順であるルーティンを子どもがいかに学習するかをテーマの1つとしています。さらに、行為の手順通りに進まない場面に對して、いかにルーティンを制御するかをもう1つのテーマとしています。総じて、子どものルーティン獲得と運用メカニズムの謎に、行動観察や心理学実験を通して迫る一冊となっています。

子どもの発達に関心を持つ方々が本書を議論の種として、目の前のそして未来の子どもたちについて語っていただければ幸いです。



バングラデシュの就学前教育 無償制度化の構造的特徴と人びとの教育選択 【明石書店】

門松 愛 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了(2020.3.23) / 名古屋女子大学 講師

バングラデシュでは、2010年頃から就学前教育が無償制度化されました。就学前教育が無償である国は後発開発途上国となると7カ国のみです。財源の限られているなかで、同国ではどのように無償制度化が展開され、また、教育熱が高まるなかで人びとは無償の就学前教育をどう受け止めたのでしょうか。

本書では、費用負担、アクセス、質の3点で構成される保育政策のトライアングルを活用し、政策的特徴を検討しました。そのうえで、公立、私立、NGOが提供する就学前教育の内実を明らかにし、人びとの教育選択の分析をおこなうことで、無償の就学前教育を制度化していく意義や課題を当該国の社会文化的背景から考察しました。

本書が、南アジア地域や途上国に関心を持つ方々や、世界の就学前教育に関心を持つ方々にとって、少しでも参考になれば幸いです。

若手研究者出版助成事業



台湾における高等教育多様化の論理

【東信堂】

廖 于晴

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了(2020.7.23)／大阪大谷大学 特任講師

台湾の教育風土は西洋からの移植、日本・中国大陸の延長線や華人社会・文化に基づくものなど単一的な様相に収まらず、東アジア諸国の中でも比較的多様性を持っていると考えられる。こうした背景のもとで、台湾の高等教育は民主化やグローバル化などに柔軟に適応し、量的拡大によって教育に対する個人/社会ニーズの複層化が進行した。本書は、こうした複層化への対応として考案された職業教育、社会人向け教育、海外学位プログラムという通常の教育とは異なる理念や役割を有する新たな教育のモデルが、いかに従来の高等教育システムに受容され、発展してきているのかを分析することで、1990年代以降の台湾高等教育の展開に伏在する論理を明らかにするものである。



「働くわたし」を失うとき 病休の語りを聴く臨床心理学

【京都大学学術出版会】

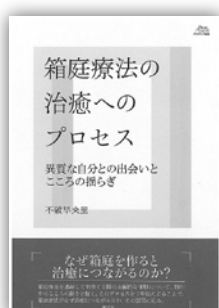
野田 実希

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了(2020.3.23)／京都大学大学院教育学研究科臨床心理学講座助教

働く人のメンタルヘルスの問題は、従来、主に精神医学や職場適応の観点から論じられ、休職は「失敗」であるとともに休職前と同じ状態に戻ることが「回復」とみなされてきました。しかし、心の病いによる休職は、その人の「わたし」という自己を揺るがす極めて個別的な意味をもつものです。

本書は、臨床心理学の視点から当事者の語りを読み解くことで、病休の体験や回復のあり方を問い直すことを試みました。さらに、病休の語りの多声性や非完結性に着目し、心理臨床実践と質的研究の接点を探ることにより、語りを「知ること」から「聴くこと」への臨牀的な展望を示しています。

対人援助職に携わる方や研究者をはじめ、広く多くの方に手に取っていただき、「働くわたし」をめぐる多様で個別的な語りとの対話から、病休理解の一助となれば幸いです。



箱庭療法の治癒へのプロセス 異質な自分との出会いとこころの揺らぎ

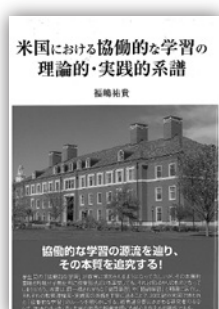
【創元社】

不破 早央里

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了(2020.3.23)／中京大学 心理学部 任期制助手

箱庭療法は、Kalff, D. M.が確立した心理療法です。日本には1965年に導入され、心理臨床領域のみならず福祉・教育などの幅広い領域で用いられています。砂を敷き詰められた箱の中に、玩具などをを用いながら自由に世界を制作する。その営みがなぜこころの治癒に繋がっていくのか、そのプロセスについては未だ明らかになっていない点も多く、日々研究が進められています。

本書では、箱庭療法の「力動」「プロセス」「連続性」に焦点を定め調査研究を行い、箱庭を制作することで制作者にどのような体験が生じるのかを検討を行い、これらの体験がどのように治癒に繋がっていくのか考察を重ねました。箱庭を制作することで起きるこころの動きや箱庭の魅力や不思議について少しでもお伝えできれば幸いです。



米国における協働的な学習の理論的・実践的系譜

【東信堂】

福嶋 祐貴

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了(2020.3.23)／京都教育大学大学院連合教職実践研究科 講師

協同学習と協調学習は近年、学習者中心の教育が重視される中で注目されていますが、その定義と理論的多様性に十分注意が払われてきたわけではありません。論者によって異なる定義や用法が見られ、そうした基本的な部分が意識されないことがしばしばであったために、グループで学習させることイコール協同学習……と考えられてしまうこともあります。

そうした問題に対して本書は、協同学習・協調学習の源流である20世紀の米国を舞台として、これらが歴史的にどう成立・展開してきたか、具体的にどのような思想が展開されてきたのか、それらが思想的にどう位置づけられるのか、全体としてどのような系譜として整理されるのかを探究するものです。本書によって、「主体的・対話的で深い学び」を考える論点と理論的枠組みを明らかにできていれば幸いです。

主な出来事 (2020.11.1 ~ 2021.3.31)

- 教育実践コラボレーションセンター
E.FORUM2020連続研究会「学校教育におけるICT活用」
- 11月13日 (金) 第5回「学習データ活用による授業実践例」
京都大学大学院情報学研究所博士後期課程 黒宮寛之氏
京都市立西京高等学校附属中学校主幹教諭 宮部剛先生
- 11月21日 (土) 第6回「GIGAまでの歩みとこれからを考える——教育のデジタル・トランスフォーメーションの可能性」
日本デジタル教科書学会副会長 片山敏郎先生
- 12月4日 (金) 第7回「教育の情報化政策の動向と学校におけるICT活用」
大阪大谷大学教育学部教授 開沼太郎先生
- 12月18日 (金) 第8回「パフォーマンス評価におけるICTの活用」
京都教育大学附属桃山小学校教諭 長野健吉先生
- 1月9日 (土) 第9回「授業における ICT活用とのための体制づくり」
東京都立石神井特別支援学校・指導教諭 海老沢穰 先生
岡山県立林野高等学校・前校長 三浦隆志 先生
- 1月23日 (土) 第10回「情報モラル教育のための様々な取り組みのご紹介」
一般社団法人ソーシャルメディア研究会 吉田航さん 西村澤さん
京都府警察本部生活安全部 サイバー犯罪対策課
神戸大学大学院医学研究科 精神医学分野・教授 曾良一郎 先生
- 2月5日 (金) 第11回「算数・数学教育における ICT活用」
京都教育大学・教授 黒田恭史 先生
- 2月20日 (土) 第12回「ICTを使ったカウンセリング」
京都大学学生総合支援センター・センター長/教授 杉原保史 先生
- 3月5日 (金) 第13回「学習科学からの知見をふまえた ICT活用」
大阪府立大学人間社会システム科学研究科・教授 岡本真彦 先生
- 3月27日 (土) 第14回「実践交流会」
E.FORUM 全国スクールリーダー育成研修「第15回実践交流会」
- 11月20日 (金) グローバル教育展開オフィス
2020レクチャーシリーズ第5回
「学びの共同体」の拡大：韓国と日本における東アジア式教育の新たな方向性
The Learning Community Writ Large: Towards a New Direction in the East Asian Style of Education in South Korea and Japan
(講演者：Youl-Kwan Sung教授 慶熙大学校教育学部大学院 韓国)
- 11月28日 (土) 教育実践コラボレーションセンター
E.FORUM講演会
「教育改革の先行事例としてのSGH —— グローバル社会に開かれた、資質・能力ベースの、課題研究」
広島県立広島高等学校学校経営担当主査 小笠原 成章先生
- 12月5日 (土) 教育実践コラボレーションセンター
E.FORUM研修会 「『総合的な探究の時間』を探究する」
西岡加名恵教授
兵庫県立尼崎小田高等学校教諭 秋山衛 先生、福田秀志 先生
滋賀県立守山北高等学校教頭(元・膳所高等学校) 小池充弘先生
福井県立若狭高等学校教諭 渡邊久暢先生
愛知県立大学教育福祉学部准教授 大貫守先生
- 12月11日 (金) グローバル教育展開オフィス
2020レクチャーシリーズ第6回
「日本型」問題解決と授業研究を用いたアメリカ都市部の学校における算数の学習支援：越境する学びの力
Using Japanese Ideas of Problem-solving and Lesson Study to Support Mathematics Learning in US Urban Schools: The Power of Transnational Learning
(講演者：Catherine C. Lewis上級研究員 Mills College アメリカ)
- 1月18日 (月) グローバル教育展開オフィス
2020レクチャーシリーズ第7回 「日本型」教育Tokkatsuの国際化
(講演者：恒吉 僚子教授 東京大学大学院教育学研究科)
- 2月19日 (金) グローバル教育展開オフィス
2020レクチャーシリーズ第8回 エジプトで受け入れられた日本式Tokkatsu—今後の海外展開の課題と可能性—
(講演者：杉田洋 氏 國學院大學 人間開発学部教授 前文部科学省 初等中等教育局 視学官 日本特別活動学会 理事 モンゴル教育大学 客員教授 全国特別活動研究会 顧問)
- 3月15日 (月) グローバル教育展開オフィス
2020レクチャーシリーズ第9回
国際協力を通じた「教育モデル」の借用・貸与—日本による「知識外交」の促進を事例として
(講演者：北村 友人氏 東京大学大学院教育学研究科)

※すべてオンラインにて実施

入試結果 2021(令和3)年度

教育学部

日程等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前期日程	文系	44	130	126	47	57
	理系	10	34	33	10	
特色入試		6	32	32	5	5
学士入学(第3年次編入学)		10	19	18	8	8

※前期日程の募集人員は、特色入試において最終的な入学手続者数が募集人員に満たない場合には、残余の募集人員を加えます。()内の数は外国人留学生で内数

教育学研究科

課程等			募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
教育学 学環専攻	修士 課程	研究者養成プログラム	37	54(14)	54(14)	27(5)	26(5)
		教育実践指導者養成プログラム	5	5	5	2	2
	博士 後期 課程	研究者養成プログラム	若干名	16(2)	15(2)	3(1)	3(1)
		臨床実践指導者養成プログラム	4	4	4	2	2

※博士後期課程(研究者養成プログラム)は内部進学者を除いた数。()内の数は外国人留学生で内数

学位授与件数 2020(令和2)年度

学位名等		授与者数
学 士	教育科学科	53
	教育学環専攻	30
修 士	教育科学専攻	1
	臨床教育学専攻	1
博 士	課程博士	9
	論文博士	2

教育職員免許状取得状況 2020(令和2)年度

中学校教諭専修免許状	0
中学校教諭1種免許状	1
高等学校教諭専修免許状	0
高等学校教諭1種免許状	3
特別支援学校教諭1種免許状	0

外部資金受入れ(2020.10.1~2021.3.31)

受託研究

研究題目	委託者	研究担当者
活力ある生涯のためのLast 5Xイノベーション拠点 「女性と子どものこころとからだの健康サポート」	国立研究開発法人 科学技術振興機構(JST)	明和 政子

共同研究

研究題目	委託者	研究担当者
災害事例分析に基づく心理的要因の解明と防止策の検討	戸田建設(株)	MANALO Emmanuel
パフォーマンス課題に取り組む授業のための様々なデジタル・コンテンツ	凸版印刷(株)	西岡 加名恵

寄附金

研究題目	寄附者	研究担当者
令和2年度発達科学研究教育奨励賞「自閉症スペクトラム症の子どもと 養育者のアタッチメント形成：共感性と認知の二重プロセスモデルの検討」	公益財団法人 発達科学研究教育センター	高松 礼奈
「教育学研究科 E. FORUM研究活動の促進」のため	凸版印刷(株)	西岡 加名恵

科学研究費補助金 2021(令和3)年度

事業名	研究課題名	氏名
基盤研究(A)	身体感覚を軸とした養育者一乳児の動態とその多様性創発原理の解明	明和 政子
基盤研究(A)	身体的表象から自他分離表象にいたる発達プロセスの解明	明和 政子
基盤研究(B)	近代日本の政治エリート輩出における「メディア経験」の総合的研究	佐藤 卓己
基盤研究(B)	実行機能を「実行」する知識の獲得過程と運用機構の解明	齊藤 智
基盤研究(B)	日本植民地統治下台湾における教育の「植民地性」再考—共時的・通時的比較分析	駒込 武
基盤研究(B)	「畏敬」の心理・生物学的基盤とその効用に関する構成論的研究	野村 理朗
基盤研究(B)	パフォーマンス評価を活かしたカリキュラム・マネジメントの改善方略の開発	西岡 加名恵
基盤研究(B)	共感覚比喩と共感覚現象に共通する認知メカニズム：大規模web実験による検討	楠見 孝
基盤研究(B)	戦後日本における政治家・財界人の教育観に関する教育社会学的研究	稲垣 恭子
基盤研究(B)	批判的犯罪学の観点からふまえた非行からの離脱過程に関する研究	岡邊 健
基盤研究(C)	「対面型遠隔教育」としてのトランスナショナル高等教育の機能に関する国際比較研究	杉本 均
基盤研究(C)	Do East Asian Students Achieve Highly at the Cost of Well-Being? Critical Analysis Utilizing PISA	Rappleye Jeremy
基盤研究(C)	ソーシャルワーク専門職教育における「多様性教育」の国際比較研究	安藤 幸
基盤研究(C)	ブータン社会における次世代支援とモラル育成—サステナビリティとスピリチュアリティ	西平 直
基盤研究(C)	共感性の発達基盤に関する縦断データを用いた行動遺伝学的研究	高橋 雄介
基盤研究(C)	近世医療情報の教育メディア史—「不安」に挑む「施印」	VAN STEENPAAL Niels
基盤研究(C)	資質・能力を育成する授業づくりを軸にした学校改善の方法論に関する開発研究	石井 英真
基盤研究(C)	自閉スペクトラム特性の強みを探る	明地 洋典
基盤研究(C)	他者の「受諾」に向けた哲学実践：アメリカ超越主義の教育的意義をめぐる国際対話研究	齋藤 直子
基盤研究(C)	日本の精神分析史の構築—古澤平作の遺品調査を通して—	西 見奈子
基盤研究(C)	明治期におけるカナダ・メソジスト教会の教育事業—公教育と学校制度の展開への対応—	田中 智子
基盤研究(C)	教育成果の質的測定を活用した教員・学校・教委連携型教育改善システムの開発的研究	服部 憲児
基盤研究(C)	心理アセスメントにおけるスーパーヴィジョンシステムの構築	高橋 靖恵
基盤研究(C)	大正・昭和初期都市新中間層における理想的人間像の形成と変容	竹内 里欧
基盤研究(C)	非英語圏トランスナショナル高等教育の展開に関する国際比較研究	杉本 均
若手研究	Round Studyの有効性の検証と評価シートの開発・効果検討	黒田 真由美
若手研究	意味的類似性効果に基づく意味的保持メカニズムの解明	石黒 翔
若手研究	人間の養育欲求と認知：社会神経学アプローチからの解明	高松 礼奈
若手研究	地理的空間・場所に基づく世界市民的教育の理論と実践に関する研究	広瀬 悠三
若手研究	童話『ピノキオ』をめぐる差別図書問題と図書館の対応に関する総合的研究	福井 佑介
若手研究	自閉症の選好性過剰説の認知科学的検討	明地 洋典
若手研究	図書館の社会的責任に関する戦後史研究	福井 佑介
研究活動スタート支援	周縁性・植民地経験とキリスト教の再認識—東アジアのイギリス人宣教師に着目して	三野 和恵
研究活動スタート支援	海外に長期滞在する日本人家庭の心理社会的適応	安藤 幸
研究活動スタート支援	教育モデルの国際移動メカニズムの検証： E D U - P o r t を一例として	高山 敬太
国際共同研究強化(A)	Towards Diversification of Global Policies to Enhance Student Well-Being and Non-Cognitive Outcomes: Bridging Education and Cultural Psychology from East Asia	Rappleye Jeremy
国際共同研究強化(B)	他なるものとの共存に向けた政治教育：日本先導によるアメリカ実践哲学の国際対話研究	齋藤 直子
国際共同研究強化(B)	認知リソース概念の誤謬に挑む国際共同研究	齊藤 智
新学術領域研究	コミュニケーション意図の推論とその非定型性に関する定量的検討（研究領域提案型）	明地 洋典
挑戦的研究（開拓）	カリキュラム空間：生徒の自己調整思考能力を高める革新的なカリキュラム編成	Manalo Emmanuel
挑戦的研究（萌芽）	「無心」の認知科学	野村 理朗
挑戦的研究（萌芽）	ビルドゥングスロマンと「女性の生き方」の表象に関する比較文化社会学研究	稲垣 恭子
挑戦的研究（萌芽）	ワーキングメモリ・トレーニングの「負の効果」を越えて	齊藤 智
挑戦的研究（萌芽）	対人相互作用における内受容—外受容感覚の統合とその発達機序の解明	明和 政子
研究成果公開促進費（研究成果公開発表(B)） ひらめき☆ときめきサイエンス	ダイバーシティと生きる：人と社会を科学する	安藤 幸

教員寄贈図書 2020(令和2)年度

寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
石井 英真	授業づくりの深め方：「よい授業」をデザインするための5つのツボ	ミネルヴァ書房	2020
石井 英真	未来の学校：ポスト・コロナの公教育のリデザイン	日本標準	2020
石井 英真	現代アメリカにおける学力形成論の展開：スタンダードに基づくカリキュラムの設計	東信堂	2020
石井 英真	教育学としての教育方法学の探求：構想と発明の学をめざして(上, 下)	石井英真	2014
岡野 憲一郎	揺らぎと心のデフォルトモード：臨界状況から生まれる創造性	岩崎学術出版社	2020
岡邊 健	犯罪・非行の社会学：常識をとらえなおす視座	有斐閣	2020
岡邊 健	犯罪学	ニュートンプレス	2021
駒込 武	生活綴方で編む「戦後史」：「冷戦」と「越境」の1950年代	岩波書店	2020
佐野 真由子	万博学：万国博覧会という、世界を把握する方法	思文閣出版	2020
佐野 真由子	만국박람회와 인간의 역사	소명출판	2020
杉本 均, 南部 広孝	比較教育学原論	協同出版	2019
田中 康裕	事例研究から学ぶ心理臨床	創元社	2020
南部 広孝	後発国における大学院教育及び学位制度の導入と変容に関する比較研究(中間報告書第3冊)	南部広孝	2020
南部 広孝	中国の大学院入学者選抜方法に関する資料集：2020年のオンラインによる実施を中心に(中間報告書第4冊)	南部広孝	2020
西岡 加名恵	日本におけるカリキュラム・授業・評価：授業研究を超えて	京都大学大学院教育学研究科 教育実践コラボレーション・センター	2017
西岡 加名恵	高等学校教科と探究の新しい学習評価：観点別評価とパフォーマンス評価実践事例集	学事出版	2020
西平 直	修養の思想	春秋社	2020
明和 政子	人類の育児スタイルは共同養育	ブックスタート	2020
矢野 智司	教育学的思考の記録：私の探究世界の地図と年表	京都大学大学院教育学研究科 教育・人間科学講座臨床教育学コース	2020
矢野 智司	일본의 교육인간학	고려대학교출판문화원	2020
山中 康裕	山中康裕の臨床作法	日本評論社	2020

受入期間：2020/4/1～2021/3/31 寄贈者氏名50音順(敬称略)
 教育学研究科・教育学部図書室にいただいた寄贈者の著作・分担執筆・翻訳・監修・監訳のみ掲載です。
 今後とも蔵書充実のためにご寄贈くださいますようよろしくお願いいたします。

人事異動 (2020.11.1～2021.4.30)

【12月31日】

事務補佐員 (教育認知心理学) 退職

【1月1日】

事務補佐員 (教育認知心理学) 採用

【3月31日】

岩井 八郎 教授 (教育社会学) 定年退職

小西 博之 事務長 定年退職

山崎 基嗣 特定助教 (附属臨床教育実践研究センター) 任期満了

事務補佐員 (附属臨床教育実践研究センター) 退職

教務補佐員 (附属臨床教育実践研究センター) 退職

事務補佐員 (図書掛) 退職

事務補佐員 (地域連携教育研究推進ユニット) 退職

廖 于晴 特任助教 (地域連携教育研究推進ユニット) 退職

朱 燁 研究員 (教育・人間科学) 退職

【4月1日】

西岡 加名恵 教授 現代教育基礎学系長 (任期R3.4.1-R4.3.31)

高橋 靖恵 教授 教育心理学系長 (任期R3.4.1-R4.3.31)

佐藤 卓己 教授 相関教育システム論系長 (任期R3.4.1-R4.3.31)

開沼 太郎 准教授 (教育社会学) 採用

野田 実希 助教 (臨床心理学) 採用

松永 倫子 特定助教 (教育方法学) 採用

豊原 響子 特定助教 (附属臨床教育実践研究センター) 採用

廣中 理絵 事務長

企画・情報部企画課IR推進室長より配置換

事務補佐員 (地域連携教育研究推進ユニット) 採用

研究員 (地域連携教育研究推進ユニット) 採用

事務補佐員 (附属臨床教育実践研究センター) 採用

教務補佐員 (教育認知心理学) 採用

【4月16日】

事務補佐員 (教育認知心理学) 採用

【4月30日】

事務補佐員 (教育認知心理学) 任期満了

諸報

新任教員・事務職員紹介

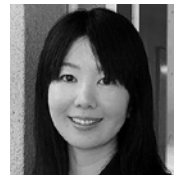


開沼 太郎 准教授

所属：教育社会学講座

専門：教育行政学分野

ニューズレターに掲載いただくのは、2001年6月のNo.2以来、20年ぶりです。初心にかえり、謙虚さを忘れずに臨みたいと思います。



野田 実希 助教

所属：臨床心理学講座

専門：心理臨床学・心理療法

この4月から2度目の新任です。専門は心理臨床学・心理療法で、語りをめぐる方法論にも関心を持ち、研究を進めています。どうぞよろしくお願いいたします。



松永 倫子 特定助教

所属：教育・人間科学講座

専門：発達科学、認知科学

養育者と乳児の心身の関連と発達の変化について研究を進めています。基礎研究と社会実装の両軸を大切に、邁進していきたいと思います。よろしくお願いいたします。

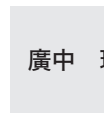


豊原 響子 特定助教

所属：臨床教育実践研究センター

専門：臨床心理実践学

長らく学生としてお世話になった京大に、今度は特定助教として着任いたしました。恩返しのつもりで日々教育、実践、研究に励みたいと思います。よろしくお願いいたします。



廣中 理絵 事務長

4月から事務長として着任しました。教育研究の現場で、日々「そうだったのか!」と発見することばかりです。一つ一つ前向きに取り組みたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

名誉教授 訃報



東山 紘久 京都大学名誉教授

東山紘久先生は、令和3年3月23日に逝去された。享年79歳。

昭和40年3月京都大学教育学部教育心理学科卒、昭和48年5月京都大学教育学博士。京都大学教育学部助手、大阪教育大学専任講師、同教授を経て、平成9年4月に京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター教授。平成15年4月～同12月教育学研究科長、平成15年12月～平成20年9月副学長を務める。京都大学名誉教授。平成22年4月～平成29年3月帝塚山学院大学大学院教授。令和2年瑞宝中綬章受章。

来談者中心療法の考えを背景とした臨床心理実践の経験に基づき数多くの著作を残すとともに、日本心理臨床学会常任理事、日本箱庭療法学会理事、日本臨床心理士会代議員等、学会・団体の要職を歴任し、日本における臨床心理学の発展および社会への普及に大きく貢献された。ご冥福をお祈りいたします。

教育学研究科・教育学部基金

ご寄附いただきました方々への感謝の意を込め、ここに芳名を掲載させていただきます。
(公開をご希望されない方については、掲載しておりません。)

※50音順 ※2021年4月末現在

荒井 克博	上田 哲司	北森 邦幸	高田 満彦	遠山 光	前田 史夫	宗教法人曹洞宗成興寺 代表役員 小倉 道紀
石原 皓次	内田 直行	木下 健一	高林 和明	長沼 弘三郎	前橋 由紀子	
一澤 源三	金沢 大士	木村 要治	千原 孝司	根木 泰郎	三尾川 友秀	
伊藤 大介	金山 靖道	柴原 弘志	辻 喜代司	野田 與一郎	南新 秀一	
今尾 邦明	川戸 良夫	真貝 多恵子	辻村 政雄	藤田 裕之	森 信樹	
上杉 孝實	川部 哲也	高 為重	辻本 雅史	保住 敏彦	山田 眞理子	

ー未来の教育を創造するため、人間・社会についての世界最先端の研究を展開し、 成果の社会還元を行うとともに、学生の教育環境の整備に取り組みますー

本研究科・学部は、1949年の創設以来、世界最先端の教育学研究とその研究者の養成、ならびに全学の教職教育の責任部局という責務を担いながら、これまで各界で活躍する有為な人材を輩出し、優れた研究成果を現場に還元することで社会の要請に応えてきました。

本研究科・学部は、学校教育はもとより、地域・家庭・職場など人が育っていくあらゆる場面を「人間形成」の場として探究しています。その中で、不登校・学習意欲不振生徒のための学校改善、過疎地域の地域振興などへの提言、教育委員会の指導主事など第一線の実践現場で働く人びとにとっての研修の機会を提供しておりますが、このような活動は、大学院生が現場のリアルな問題に触れながら自らの研究関心と手法を研ぎすますための教育の場でもあります。

近年、社会と連携したこうした教育研究活動の必要性が増す状況において、本研究科・学部が社会と連携しながら実践的な教育・研究を行うためには、安定した財政基盤が必要です。その礎の一つとして、2015年に「教育学研究科・教育学部基

金」を設立しました。本基金では、研究の成果を現場（フィールド）に返し、また現場での課題を教育・研究に生かしていく、「理論と実践の往還型」の教育・研究という本研究科・学部の特色ある活動を維持するため、以下の活動に活用します。

皆さまのご協力をよろしくお願いします。

基金の使途：

項 目	具体例
(1) 教育支援	・学生のための図書・教材等の購入 ・学生関係居室の整備・維持管理 ・障害学生等のための学習補助者の雇用 ・学生・院生の海外派遣 など
(2) 研究支援	・研究活動基盤整備の支援 ・研究・学術資料の整備 ・公開講座・講演会等の開催 など
(3) その他事業支援	・京都大学教育学研究科シリーズ本の出版補助 ・修了生・卒業生との連携活動 など

詳細については以下をご覧ください。

<http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/education/index.html>

。編集後記

新型コロナウイルスの世界的流行により、授業のオンライン化など本学でもさまざまな取り組みを重ねてきました。しかし、大学の役割は学術の知を伝授するにとどまりません。専門知識や技術以外の面を育てる役割も担っています。今回のニューズレターでは、コロナ禍に入学された学生さんのリアル声をお届けしたいと考えました。コロナ禍は長期化しそうです。大学の役割をいかに果たしていくことができるか、自問し続けています。

(明和 政子)

。表紙によせて

2021年3月3日に第21回教育学部祭を実施いたしました。コロナ禍ということもあり、ほとんどがオンラインという開催になりましたが、教職員の方々のご協力の下で、集合写真という形に残るものが出来上がりました。参加した学部生は、オフラインでのひさびさの集合ということもあり、大変喜んでおりました。本当に感謝申し上げます。行いたかったことは他にもたくさんありますが、ひとまず下の世代に学部祭というバトンを渡せたのではないかと一安心しております。来年は例年と同じ形で実施できることを、そしてそこへOBとして参加できることを真に願っております。(第21回教育学部祭代表 八神 公亮)



京都大学教育学研究科・
教育学部広報委員会

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛

委員長 明和 政子 教授(教育・人間科学講座)
委員 竹内 里欧 准教授(教育社会学講座)
委員 梅村 高太郎 講師(臨床心理学講座)

ホームページ <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp>



2022年、京都大学は
創立125周年を迎えます。



ガイドドッグペーパー
当印刷物の用紙費用の一部は
関西盲導犬協会に寄付されています